

読賣新聞

2015年(平成27年)

6月4日木曜日

大津絵研究書 フランスで刊行

江戸時代初期に近江(滋賀県)で生まれた民衆絵画「大津絵」。素朴で滑稽味あふれる魅力を、日仏文化的な視点で考察した仏語の書籍『ÔTSU-E』(フィリップ・ピキエ社)がこのほど、フランスで刊行された。国外で



大津絵の専門書が出版されるのは異例だ。

著者は東京・恵比寿の日仏会館フランス事務所長で仏国立東

洋言語文化大学教授のクリストフ・マルケさん(50)＝写真＝。大津絵は東海道の土産物として人気を博すが近代に急速に廃れる。一方、1900年のパリ万博で最先端の装飾芸術に触発された洋画家の浅井忠は、帰国後に大津絵を工芸デザインに応用した。

25年ほど前の東大留学中、浅井の研究を通じて大津絵にひかれたマルケさんは、「浅井は大

津絵をモダンに再解釈した。擬人化や動物を描く大津絵の風刺は普遍的なもの」と話す。著書では大正・昭和期の篆刻家、楠瀬日年が、江戸期全般の大津絵を臨写した1920年の版画集から約80点を再掲。また、戦前に来日した仏文化人類学者アンドレ・ルロワ＝グーランが肉筆の大津絵や楠瀬の版画集を入手し、戦後のパリで大津絵を含む民芸展を企画したことなどを紹介している。

「楠瀬の版画集は民芸運動の柳宗悦に批判されたが、そこには肉筆では現存しない初期大津絵の画題もあり、美術史的な意義はある」と、マルケさん。邦訳版の刊行も検討しているという。

(文化部 井上晋治)